

2020年度 第3四半期 決算説明会 質疑応答（要旨）

Q1) 第3四半期累計の実績における計画対比、並びに通期の見通しについて教えてください。

- A1) ・ 第3四半期における航空事業の営業利益は、計画を約330億円上回りました。国際貨物で堅調な需要を積極的に取り込み、四半期で過去最高の売上高を記録するなど、上期に比べて航空事業の減収額を抑制しました。
- ・ 第4四半期も、国際貨物の売上高は前年を大幅に上回る水準で推移する見通しです。緊急事態宣言の影響により、国内旅客は需要が計画を下回っていますが、生産量を柔軟に調整するなど、機動的なコスト削減に取り組むことにより、通期の業績目標を達成できるように尽力しています。

Q2) 足元における旅客・貨物需要の動向を教えてください。

- A2) ・ 各事業の需要動向は以下の通りです。
- [国際旅客] 出入国制限の再強化により、需要の低迷が継続
 - [国内旅客] 緊急事態宣言の影響で旅客数は前年比▲7～▲8割、但し足元で予約の解約は下げ止まり
 - [国際貨物] 1～2月平均で前年並みの重量を維持、堅調な需要基調が継続
 - [Peach 国内線] 旅客数は前年比▲6～▲7割、緊急事態宣言解除後の需要回復ペースを注視

Q3) 国際線貨物事業について、生産量を更に拡大する余地はありますか。

- A3) ・ フレイト機は保有する11機を最大限に活用しており、既に高い稼働状況となっています。今後はより単価の高い需要を獲得できる路線に投入していきます。その上で、貨物需要の動向を見極めながら、旅客便の復便並びに旅客機を使用した貨物便の運航によって生産量を最大化し、更なる増収を目指します。

Q4) 固定費の削減効果について、第3四半期実績に比べて第4四半期見通しが縮小するのはなぜですか。

- A4) ・ コスト削減額については、前年同期の実績から自助努力によって費用を減額した効果を算定しています。
- ・ 一部の施策は、新型コロナウイルスによる影響が現れ始めた2019年度第4四半期の後半から取り組み始めているため、今年度の第4四半期における固定費の削減効果は、第3四半期に比べて小さくなる見通しです。
 - ・ 今年度の固定費削減額の最新見通しは1,580億円となり、昨年10月末に策定した計画に比べて、深掘りしています。

Q5) キャッシュフローの状況について教えてください。

- A5) ・ 第3四半期単独の営業キャッシュフローは約▲100億円となり、第2四半期に比べて支出の規模が縮小しました。
- ・ 実質フリーキャッシュフローで見ても、1日あたりに換算したキャッシュの流出額は、
[第1四半期] 約▲19億円 → [第2四半期] 約▲9億円 → [第3四半期] 約▲5億円
となり、年度当初から着実に改善しています。
 - ・ 設備投資額は年度計画で2,550億円としていますが、投資の抑制に努めていることから、現時点で計画を下回る見通しです。
 - ・ 引き続き、資金流出の解消に向けて着実に取り組んでいきます。

Q6) 緊急事態宣言の影響を踏まえ、今年度末の旅客需要水準をどのように見通していますか。また、来年度の黒字化に向けた取り組みについて教えてください。

- A6) ・ 第2四半期時点では、今年度末において旅客需要がコロナ前の通常水準に比べて国際線5割、国内線7割に回復すると見込んでいましたが、緊急事態宣言の影響で需要が低迷しており、今年度末までに回復するのは難しい状況と考えています。
- ・ 但し、昨年10～11月の国内線における座席利用率は6割を上回り、感染拡大の収束などのきっかけがあれば需要は急速に回復することを確認しました。また、国際貨物は堅調な動向が持続する見通しです。
 - ・ ワクチンが開発から接種の段階に移行するなど、来年度に向けて明るい兆しも見られます。このような事業環境を踏まえ、来年度の需要前提について、期初・期央・期末に区分してシミュレーションを実施しています。
 - ・ 需要動向を見極め、今まで以上に機動的に生産量を調整し、コストマネジメントを徹底することで、来年度の黒字化に向けて蓋然性を高めていきます。

以上